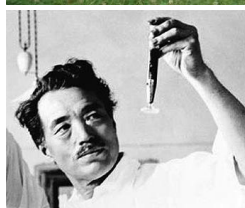


ニューヨーク郊外、ブロンクスに野口英世博士 と高峰讓吉博士のお墓を訪ねて



野口英世 <1876(明治9年) - 1928(昭和3年)>

細菌学者の野口英世博士は、黄熱病の研究中に、その黄熱病にかかって亡くなりました。アフリカでの黄熱病の研究のためにガーナのアクラへ赴いた翌年の5月21日でした。出身地の福島県翁島村(現猪苗代町)とニューヨーク郊外のブロンクスにお墓があります。

1899年、アメリカの細菌学者フレクスナーが来日、その通訳をつとめたことを機に渡米を決意。1900年(明治33年)12月、上京後世話になった歯科医血脇守之助(ちわきもりのすけ)の援助を得て渡米し、ペンシルバニア大学にフレクスナーを訪ね、彼の厚意で助手となり、デンマークで血清学を学んだ後、フレクスナーが初代所長を務める新設のロックフェラー医学研究所(後のロックフェラー大学)に入所。1914年、正所員に昇格。コッホから始まる細菌学的医学権威の最後の1人とも言われ、ノーベル賞生理学・医学賞の候補に3度名前があげられました。

通常、伝染病で亡くなるとその地で火葬し、遺体はアメリカに持ち込むことが出来なかったのですが、ロックフェラー医学研究所を創設したジョン・D・ロックフェラーは、重要な研究員であった野口英世博士の遺体を、特別なお棺を作り、密閉してニューヨークに送らせ、このウッドローン墓地に埋葬しました。

写真の奥のおにぎりのような形の墓石が博士のお墓で、手前の石碑には「Dr. Hideyo Noguchi 1876~1928, Mrs. Mary Noguchi 1876~1947」と刻まれています。今年の命日には、米国日系医師会が中心になって、誕生135年の記念式典が行われました。その時の花輪が枯れてしまっていて、カサハナ君の撮影の時に片付けようとしたのですが、しっかりと地中に差し込まれていて、動かすことができず、ちょっと寂しい写真になってしまいました。

(お墓の写真撮影 - ジョニー・カサハナ)



高峰讓吉 <1854(嘉永7年) - 1922(大正11年)>

科学者、実業家、工学博士、薬学博士。越中国高岡(現 富山県高岡市)生まれ。加賀国金沢城下の梅本町(現 石川県金沢市梅本町)育ち。世が幕末を迎えた1865年(慶応元年)、12歳で加賀藩から選ばれて長崎に留学して海外の科学に始めて触れる。

1880年から英国グラスゴー大学への3年間の留学を経て、農商務省に入省。1884年にニューオリンズで開かれた万国工業博覧会に事務官として派遣され、そこで出会ったキャロライン・ヒッチと婚約。1887年に結婚、1890年にかねてより米国で特許出願中であった「高峰式元麹改良法」(ウイスキーの醸造に日本の麹を使って、従来の麦芽から作ったモルトよりも協力的なデンプンの分解力を持っていた)を採用したいというアメリカの酒造会社から連絡があり渡米。その後、アメリカでタカジアスターゼを発明し、日本で三共製薬(現在の第一三共)を作り、シカゴでアドレナリンの抽出に世界で初めて成功。医学の発展に大きく貢献をしました。100年以上たった今でも頻繁に使われている薬は3つ、アドレナリン、タカジアスターゼとアスピリンだけです。

特許収入で大金持ちとなった高峰讓吉は、民間大使としても日米間の重要な架け橋の役割を担い、ニューヨークの日本倶楽部の創設、ワシントンのポトマック川の桜やニューヨークの桜公園の桜の寄贈に貢献し、日露戦争の広報活動でも活躍しました。日本クラブではよく若い野口英世と将棋をさし、交友を深めたそうです。

高峰博士自身は生前、死んだら灰にして日本とニューヨークでの2つの墓に分骨を予定していたのですが、死ぬ前にキリスト教に改宗し、火葬せず、このウッドローン墓地に埋葬されました。7月21日が命日です。

(お墓の写真撮影 - ジョニー・カサハナ)

ニューヨーク郊外、ブロンクスに野口英世博士 と高峰譲吉博士のお墓を訪ねて

デューク・エリントン (1899年-1974年)

ジャズ・ピアニスト、作曲家、オーケストラ・リーダー。ワシントン、D. C. 生まれながらも、ハーレムの「コットン・クラブ」などで活躍。「A列車で行こう」、「サテンドール」、「キャラバン」などのたくさんの代表曲があります。

以前、吉田ルイ子さんの「ハーレムの熱い日々」という本で読んだ逸話がまだ私の心にひっかかっています。吉田ルイ子さんは60年代の初めにフルブライトでアメリカに来た女性です。コロンビア大学で勉強中に写真家に変身。五番街のお金持ちの家でのパーティーに行った時のことです、玄関を入るともうたくさんの人たちが着飾ってダンスに興じていました。演奏は当時飛ぶ鳥を落とすような勢いの人気バンド、デューク・エリントン楽団。演奏の休憩時間に偶然彼らの控室が目にはいつてしまいました。一息を入れるための飲物やおつまみもない殺風景で狭くて蒸し暑い小部屋。楽団のメンバーたちは冗談を言ったり楽しそうに休憩をしていましたが、メインのボールルームの豪華さとの違いに唖然としてしまいました。

もちろんデューク・エリントンにとっては演奏料さえ払ってもらえれば関係ないのですが、でも当時のアメリカの差別、裏社会をみてしまったような.....

左上の写真は、エリントン家のお墓で、その下はその中にあるデューク・エリントンの墓石。 (お墓の写真撮影 - ジョニー・カサハナ)



マイルス・デイビス (1926年-1991年)

ジャズ・トランペット奏者。イリノイ州アルトン生まれ。翌年にイースト・セントルイスへ引越す。祖父はアーカンソー州に広い土地を持ち、父は歯科医、母は音楽の教師という裕福な環境で育つ。13歳の誕生日に父親からトランペットをプレゼントされ、演奏を始め、セントルイスのクラブで一流ミュージシャンと競演しながらジャズの勉強をする。晩年はセントラルパーク・サウスのマンション(元 日航エセックスハウス・ホテル)に住んでいました。私の好きなアルバムは「スケッチ・オブ・スペイン」で、編曲家のギル・エバンスとの共同制作です。 (お墓の写真撮影 - ジョニー・カサハナ)



イリノイ・ジャケ (1922年-2004年)

日本ではあまり知られていないようですが、私の大好きなサクソ奏者です。ハーレムのクラブで何回か会ったことがありました。いつもお母さんと一緒に、陽気にお喋りしながら音楽、お酒、雰囲気を楽しんでいるようでした。

(お墓の写真撮影 - ジョニー・カサハナ)



ニューヨーク郊外、ブロンクスに野口英世博士 と高峰譲吉博士のお墓を訪ねて

ニューヨーク郊外、ブロンクスに
野口英世博士と高峰譲吉博士のお墓を訪ねて(サンプル・プラン)

9:00	マンハッタンのホテルを出発 野口博士と高峰博士の関連スポットを観光 日本クラブ、さくら公園、リバーサイド・ドライブ セント・パトリック教会、ルーズベルト・ホテル ロックフェラー大学
11:00	ブロンクスの墓地で野口博士、高峰博士、デューク・エリントン、マイルス・デイビス、イリノイ・ジャケーのお墓を訪ねます
13:00	近くのニューヨークで一番美味しいと言われる、列のできるホットドッグ屋さんで簡単な昼食
14:00	ホテルに戻って終了

お1人様の料金: \$ 186.

料金に含まれるもの: 専用車(ガイドが運転手を兼ねます)、昼食、チップ

最小催行人数: 2名様から

取消料: 前々日、前日、当日のお取消は全額



美味しいホットドッグに舌鼓



安心のキャデラック・サービス



仲間が集ったら、10人乗りバン